

## 日本品質管理学会の新たな役割 Network of Qualityの歯車として



独立行政法人統計センター  
橋 広計

敗戦後、米国から日本に“Q 遺伝子”が組み込まれました。日本の先達は、着実な Q マネジメントを Q 活動自体に適用し、学習と実践の積み重ねを通じて、独自の日本型遺伝子(JQ 遺伝子)に進化させるコトに成功し、産業界国際競争力を裏支えました。欧米はこの急速かつ自律的進化を日本の奇跡と称し、1990 年代以降 JQ 遺伝子の自国産業界・学界・教育への組み込みを行い、変異させました。工程改善はシックスシグマ(QC ストーリーは、DMAIC)に、方針管理はバランススコアカードに変容しました。一方、日本はこの四半世紀、その前の四半世紀に比して JQ 遺伝子を現場やマネジメントに継承し、進化させ続けるコトを重視しなくなりました。結果として、Q 指導者の高齢化、Q に関わる研究教育拠点減少が進んでいます。近年、Q 不祥事に企業品質保証部が加担し、QC の社会的信頼を失墜させ、先達の努力を汚すことも生じています。このままでは、世界の称賛を得た JQ 遺伝子は、次の四半世紀で絶滅するのではないのでしょうか。

このような中、第 44 年度大久保尚武会長は、4 つの SHINKA、「真価、深化、新化、進化」を図る中長期計画を策定しました。特に、大久保前会長は、Q を重視する産官学の緩やかな Network として“Japanese Association for Quality(JAQ: 仮称)”を創設するコトを 2015 年 6 月に日本科学技術連盟(JUSE)主催の第 100 回品質管理シンポジウムで JSQC 会長として提言されました。JAQ 創立は SHINKA 計画最大の柱ですが、JSQC 単独で行うことは不可能です。JAQ 2018 年設立を目指し、JUSE、日本規格協会(JSA)、JSQC の 3 者が協力してコトに当たることを合意し、3 者調整委員会も設けました。JSA、JUSE に限らず、Q のあるべき実践・必要な研究・標準化・教育啓発に意の有る全

ての企業・教育機関・学会等が JAQ に参加することが期待されています。JAQ 創生は、次世代の Q 指導者・研究者を形成する教育研究拠点復興とあらゆる分野での JQ 遺伝子進化のサイクル構築に資するものとなるでしょう。

私は、Q 専門とは申せませんが、JSQC が JQ 遺伝子の進化の触媒となるべく、Q 専門の理事の方々と共に尽力する所存です。

すなわち、JSQC は、その SHINKA 計画に従い、JAQ の歯車に徹するために、46 年度から活動を重点化します。JAQ 創生に向け、Q の深みを究め(究深)、新しき Q の分野を求め(求新)、再び急速な進化を実現し(急進)、以て危機に瀕する我が国の Q の真価を救う(救真)体制を築くための質改善活動を進めるのです。本部活動は、会員のボトムアップ活動以外は、Q に影響を与える情報環境変化等に対応する次世代 Q 研究と、サービス・情報・公共政策など質の追求原理の開発が求められている新分野 Q 開拓研究に重点化します。出版・事業・広報などもそれを支える活動に限定します。これまでの普及啓発事業は例外的とし、JSA、JUSE の事業を公的に支援する立場に徹します。また、支部活動は、産業界等が抱える難易度の高い Q 問題にソリューションを提供し、共有する産学協働を中心とします。46 年度は、その体制整備を行います。

Q 問題の多様化の中、これら重点項目ですら、JSQC 単独で支え切れるものとは考えられません。しかし、必要な学術・技術は他学会から人財を招へいし、JAQ に参加して頂けるような関係性構築にも努力したいと考えています。ぜひ、JSQC の新たな方向性・役割を会員の皆様にご理解いただいた上で、忌憚ないご批判・ご意見をお願い致します。

## 44年度を振り返って



積水化学工業(株) 相談役  
大久保尚武

平成 27 年 11 月 14 日、京都で開催された第 45 回通常総会において会長の任期が終了いたしました。会員の皆様方の学会活動へのご支援とともに、両副会長をはじめ各役員、各支部役員並びに事務局の方々のお力添えをいただきながら、この 1 年間何とか務めさせていただきましました。心から御礼を申し上げます。

第 44 年度は、新長期計画の初年として基本方針「日本品質管理学会 SHINKA!」を掲げ、「真価」「進化」「深化」「新化」という 4 つの SHINKA 活動に着手しました。この新長期計画は、長期計画検討会を新設し検討を重ねました。これまで私は品質管理に対しては非常に敬意を払っておりましたし、今の日本の製造業が世界で大きな貢献をしているのも、日本の品質に対する信頼性が絶対的なものであり、大きな潜在能力を持っているからだという信念を持っておりました。しかし、産業界が大変革して世界の中で戦うために、新しい体制を作らないといけないという時に、その可能性を私はフルに発揮しているとは思えませんでした。もっといろんな対応の仕方がある筈だ、かつて日本の製造業が世界に本当に誇れるような姿をもう一度作りたいと思いました。そのためには、品質管理の力をもっと磨き上げないといけないと考えておりました。このような私の非常に素朴な思いを委員の方々にぶつけた中で、皆様から幾つかの貴重な提案をいただきました。このようなことについて、6 月の第 100 回品質管理シンポジウム(日科技連主催)にて発表しました。

1) 真価(Future value)：日本の成長に貢献する品質管理の発展と普及のために、All Japan の品質活動の統合を目指したアンブレラ組織「JAQ(Japan Association for Quality)」創設を起案しました。構想実現のため、日本科学技術連盟、日本規格協会との三者間で調整作業を開始し、3 年後の創設を目

指しております。また、品質管理の新たな成長分野を切り拓くために、2016~2020 年 科学技術イノベーション戦略の根幹である「第 5 期 科学技術基本計画(中間取り纏め案)」に対して、内閣府(原山優子議員等)に、品質管理の重要性への理解を促し、最終案への盛り込みを請願しました。

2) 進化(Evolutionary value)：産業界の課題解決および研究開発が、学会の本質的なコア活動と捉え、その組織体制に移行するように方向付けしました。特に、若手研究者の育成および実践能力向上、品質誌の研究開発成果の掲載など進めております。

3) 深化(Deepened value)：研究会・部会・特別委員会が一同に介する第 3 回研究開発ワークショップを行い、今後の研究活動の方向性について議論し、研究成果と課題を共有化しました。

4) 新化(New value)：日本産業界の変化に対して、将来期待される新しい価値創出・新分野への展開として、農業、医療の質・安全、サービス産業、おもてなし、データサイエンス等、新しい品質管理の研究活動を始めました。例えば、ビッグデータ時代の到来に伴う統計学部・学科の人気の高まり、データサイエンス教育の充実が不可欠な状況となり、学会として新たな学部新設(滋賀大学データサイエンス学部)の嘆願を行うなど、新しい時代の要請に応じております。

このように、組織的にも体制的にも、品質管理という位置付けを日本国内で明確にしながら、今後日本の品質管理という力をフルに発揮できるように、是非新しい椿会長以下、皆さま方のご尽力により達成されることを心よりお願いして、この一年間の皆様のご協力に、心から御礼申し上げるとともに、期待申し上げて、私の退任の挨拶にさせていただきます。本当に有難うございました。